

池田 觀纂  
田 輯

# 小學修身新篇

初等科

卷四

176  
4  
168

大日本教育會館			
一	二	一	一
一	八	二	八
冊	號	架	函

東

竹  
花

百一  
一  
易

K110.1  
9  
4

福羽美静校閱  
池田 觀纂輯

初等科卷之四

# 小學脩身新篇

版權所有

東崖堂刊行

小學脩身新篇卷之四

福羽美静校閱

池田 觀纂輯

## 第十一章

○倫理を正ふことし恩義を篤くせ  
るは家人の道なり。 近思錄

○喜怒色に形はさざれば名を成

とあるも。大功をたつべし。五種遺規

○大事を處とる者ハ。勞と怨とを

辭せず。上同

○少言沈黙を尤善し。讀書録

○君子の交りハ。水の如く。小人

の交りも。醜の如し。禮記

○心正し。けまじ。事正し。讀書録

○心も水の源の如し。源清ければ。

流清し。上同

○人と語る時は。人に其長する所

を。説かしむべし。我ハ益あり。言志録

○好き人と為らんこと。要せむ。

好き友を。尋ねべし。小兒語

○人の惡を。稱とる者を惡み。下流

に居て。上を誦る者を惡む。論語

○之を知るをしようと為し。知らざるを知らざとせよ。論語

○人の言を聴くハ。多きを厭はむ。  
たのまれば言も多くすべのらむ。

○自ら重んずるものハ。人に下り

て。道を求む。明黄庭堅

佐藤坦

○自ら道不違ハざれを。家みづから治まる。櫻井書

○學問ハ。身を脩むるためなり。名利の事と思ふべからず。今川状

○人に問ふを好み。自ら省るものは。過失少ふ。杏翁醉語

○學問の道ハ。寝ても覺めても忘る

べからず。北条長氏

○學問を以て傲慢の資をこまる人  
を無學の人と劣るべし。杏翁醉語

○學問の道は他あり。善事をなし  
惡事をふさむるに止まるのみ。備身録

○富貴は天のあたふる所ありら  
む。人の勤め行ふ所なり。大内正恒

○僅小義に志せむ。君子の路小入  
り。少しく利ふ志せば。小人の路に  
入る。性理字義

○不仁なる者あり。必好みく。人の短  
を許く。仁齊日札

第十二章

○人道は敬にあり。敬もこま。終身

の孝なり。言志菴録

○人を犯さざるは易く。人の  
我を犯せるは報ひざることは難

大和俗訓

○内小徳を積み。外小一藝をたし  
なむ。其名顯まじといふことありし。

藤原公重

○人の誠を為す事ハ。天地神明に

通じて。萬の人は是を仰ぐ。藤原秀郷

○事に敏少して。言に慎み。有道小  
就きて正す。學をこのむといふべ  
きののみ。論語

○賢をみては。齊しからんことを  
思ひ。不賢を見ては。内に自ら省る。

論語

○人に交はるにも。厚きを本とす。厚しとも。人を責めずして。我を責むるなり。大和俗訓

○己を責むまば。身脩り。人を責めざれば。恨を招くことふし。上同

○人禮を失ふも。咎むべからざ。禮を知らざるの人。狂人と同じ。上同

○一飯の恩も。忘まふとして。報うべきは。人の道なり。父子訓

○己の分を知りて。後不足ることを知る。言志録

○心を養ふは。欲を寡くするより。善といふなり。孟子

○無益の事ふ。財を費といふ愚あり。家道訓

○一粒の米。一寸の紙も。大切にす

べし。梧窓漫筆

○心の奢りを。やきめざれば。事を

儉ふするあたはず。五倫書

○天道ハ善書經不福ひし。淫左氏傳に禍ひす。

○神も仁國語不福ひして。淫左氏傳不禍ひす。

○天道ハ善國語に賞して。淫左氏傳に罰す。

○人を愛し。人を利をるハ。天必ふ

まふ福ひす。墨子

○人を愛し。物に利をるを。これ仁

の謂なり。莊子

○大徳ハ。必其位を得。必其禄を得。

必其名を得。必其壽を得。中庸

○孝子の。老を養ふや。其心を樂ま



しめ。其志に違はざらば。其耳目を樂ま  
しめ。其寢所を安んじ。其飲食を以  
て。之を忠養す。曾子

### 第十三章

○人も孝行あるを第一とす。智慧  
秀て世渡る事の善きものも孝と  
忠ともなすもれあり。恥づき事小

ころ。藤原齊繼

○人の恩を受けて。負ふ忍びざるも  
のは。其子たる必孝なり。臣たる必  
忠なり。司馬温公

○少うして。勤苦せざれば。老いて必  
艱辛ふり。省心雜言

○少うして能く。滂を服すも。老い

て必安逸なり。上同

○身體ハ寛慢にすべからず。寛慢  
なまじバ放肆少して。端嚴みらず。

○道を教ふる。父師ハ其恩尤重し。童蒙須知

君父と同じく。貴ぶべし。初學訓

○少年ハ恭遜を先とし。忿争を戒  
むべし。及門遺範

○人を待つとも。嚴ふ過ぐべからず。

これ人を安んずるの法なり。省譽録

○身を行ふは。嚴ふせざるべから

ず。上同己を治むるの法なり。上同

○勞苦と樂み。本業を營み。其後衣

食。必餘りあり。明倪正父

○人の患ひハ。易しとする。心よる

生む。慎むべし。言志後録

○勝事ばかり知りて。負る事を知らざるも。害其身に至る。杏翁醉話

○事最も。軽忽にまべからず。至微至小なる者と雖。まふ當ふ慎重を以て。之を處まべし。明薛文清

○身體放肆まして。端嚴まらざれ

ば。人ふ輕賤せらる。童蒙須知

○和らげを仇なく。忍ぶを辱まし。

○智者ハ言を慎み。行ひを慎みて。

身の福ひをなす。賈誼新書

○謙とも。自ら卑下して。誇らざる

なり。大和俗訓

○人は小成不安んじ。驕慢の心を。

出だすべからず。良齋文略

○貧極りて。儉約せざる人も。親しく交わるべからず。願體集

○富んで。貧乏者を忘るべからず。貴くして。賤しき者と侮るべからず。初學訓

○千丈の堤も。螻蟻の穴より潰ゆ。韓非子

○天を怨まむと。人を尤めず。論語

○人と誹るも。不仁あり。且吾小於て益をなし。人もし。之を聞かむ甚害あり。大和俗訓

第十四章

○志を立つるは。最も高きを要す。これ學となす。緊要のことなり。畜徳録

○人の心は本廣大なまごとも。一此私心あれむ。狭小にふるあり。上同  
○智恵ハ。研かざまば。大智いづることな。櫻井書

○君子も。我の愚を憂へく。人の智を憂へず。呂祖謙

○勝を好むは。人の大病なり。讀書録

○天下の難事ハ。必易をふ作り。天下の大事も。必細をに作る。老子

○禍ひは多言より。大ふるはあし。文中子

○平心和氣も。是身を養ひ。徳と養ふの至りなり。貝原篤信

○仁義うちふある人は。よくさかえ。利欲内にあるものも。必亡ぶ。

智仁親王

○餘りあるを待ちて。人を救はむ。  
必人を濟ふの日なし。暇あるを待  
ちて。書と讀まむ。終ふ書を讀むの  
時ふし。紳瑜集

○知ることは。難きにあらむ。行ふ  
も難し。書經

○天の作せる孽は。なほ違ふべし。

自ら作せる孽は。違ふべからず。書經

○朝早く起るも。家の滌ゆる兆な  
り。晩く起るは。家の衰ふる基ひふ  
り。大和俗訓

○正直も。一生の寶なり。聖諭

○小人を防ぐの道は。己を正しく  
するを先とす。近思錄

○誠を妄語せざるより始む。司馬光

○父母長上教誡すること何らば。

首を低まて之を聴くべし。妄りに

自ら議論をべからば。朱子

○一言の過ちは莫大の過ちとな

り。一事れ失も。脩身の憂へとなる。

慎まざるべし。大和俗訓

### 第十五章

○人の善を聞いて疑ひ。人の悪を聞

いて信じ。好んごと人の短を説き。人の長

を計らず。其人平生必悪ありて。善

なき。願體集

○身を終ふるまで。路を譲まごも。百

歩を枉げど。身を終ふるまで。畔を譲れ

ども。一段を失はず。願體集

○盛年も重ねて来らば。一日も再び  
晨あり難し。時不及で。當に勉強す

べし。歲月ハ人を待たず。陶淵明

○書を觀るべし。一巻なれば。二巻の益あり。  
書を觀ること。一日ふまをも。一日の益あり。

○事を做す。最も宜く。熟思緩處を

明倪文節

づし。熟思すまじ。其理を得。緩處を  
れを。其當を得。紳瑜集

○君子能く。人の危を扶け。人の急  
と救ふ。固より是美事あり。誇らざ

れば益善し。願體集

○小人も専ら。人の恩を望む。恩過  
くまば感ぜむ。君子も軽く人の恩



を受けど。受くれれば忘る難し。紳瑜集

○薄徳の者も。必刻薄なり。刻薄をまば。福更不薄し。厚徳の者も。必寛厚なり。寛厚をまば。徳更不厚し。同上

○生る物を。小ふりとも。故なくして。猥り不殺さず。家道訓

○善に善報あり。惡小惡報あり。善

惡報なきは。時節未だ至らば。

事林廣記

○陰徳ある者も。必陽報あり。陰行ある者も。必昭名あり。准南子

○天を敬むること。當に吾心を敬するより始むべし。其心を敬する。ふと能はずして。よく天を敬むる。

と謂ふ者も妄なり。明薛文清

玉市爰石寺 詔

小脩身新篇卷之四終

附録禮法生徒心得

凡て起居進退起つ様ハ。右の手を膝の上小置と。左手の指先を膝の脇に着け。腰を立てふがら。足の爪ささをも立て。右の膝を少しくあげ。体の起つ小随ひと。左の足を揃へて立つと。歩み様ハ。両手を膝の上小伸づ。臂を張らど。肩を平かふして。腰を屈め。胸を出ださず。踵を地に付け。ふづかにまろくと歩むと。坐る様ハ。右の足を少しく進めと。跪と。左の膝を揃へ。右の足の拇指を左の拇指かさねて。坐

し。両手を膝の上小置くべし。

但貴人の側近を所はくは。両手の掌を。稍外へ向け。膝の兩脇小。指先をを着くべし。

拜する様ハ。両手の指先を向ふつふし。臂をも着け。左右の拇指と次指とを突合せて。其上小額を着け。腰の高くあらぬ様小。背を平かにし。拜するなり。

椅子ふよりたる人を拜する時ハ。両手を膝頭まで下げて禮をべし。又椅子ふありて。人に禮をする時ハ。椅子をはふれて起ち。稍其脇によりて。前の

如く拜禮をべし。都て立禮ハ。拜する時。腰を屈するも。膝並小。小臂の曲らざる様小。注意をべし。

起ち還り様ハ。右の手を膝の上に置き。左手の指さきを。膝の脇に着け。腰をたぐ。足を爪立て。右の膝を少しくあけ。稍右坐の方小向ひて起ち。下坐へ廻りて還るふり。

但着坐の模様ふよりて。左へ披くべき時ハ。右の反對と心得べし。

人の前後を過くる様ハ。上輩へも。下坐のかたの足より進みて跪き。両手の指さきを着けて。會釋

し。下坐の足より立ちて過ぐべし。同輩への両手を膝頭の上まで下げ。會釋して過ぐべし。障子襖の開閉ハ。障子襖を右へ開かんとせむ。右のかたへよりて。常の如く跪き。左の手にて引手をとり。少く開き。次に右の手を柵ぎはより。三四寸程上の處ふ着け。能く程ふ開くべし。夫より立ち跪き。左の手はく大く閉ざし。次ハ右の手ふてとざし盡すとべし。

但し左へ開く時ハ。右の反對と心得べし。

附録禮法生徒心得終

明治十五年九月廿九日版權免許  
同 十六年四月 出版

福井縣士族

編輯人

池田

觀

岐阜縣平民

出版人

山岸彌平

大阪府東區常磐町  
同府同區北濱二丁目  
五十五番地寄留



發兌

東京々橋區桶町

東崖堂

大阪東區北濱二丁目

東崖堂

書肆

岐阜縣岐阜西材木町

東崖堂

池田 觀 纂  
田 輯

# 小學修身新篇

初等科

卷五

176  
4  
168

大日本圖書會館			
一	二	一	
一	八	二	八
冊	號	架	函

館  
函  
架  
號

K110.1  
9  
5